

第2次大戦下日本の「生活科学新書」について

北 林 雅 洋

On 'Seikatsu-Kagaku-Shinsho' in Japan during World War II

Masahiro KITABAYASHI

Abstract

'Seikatsu-Kagaku-Shinsho' is a series of books about science of daily life, consists of 49 volumes that were published by Hatashoten from August 1941 to December 1947. Recently, I found and have studied them for the first time from the view point of history of science.

This paper shows an overall picture and some modifications of this series of books, and attempts to make it clear what is the substance of 'Seikatsu-Kagaku' in Japan during World War II.

Compared with some other series of scientific books in those days, the characteristic of 'Seikatsu-Kagaku-Shinsho' was to be attempted to explain daily life connected with science. But, in 1942, with the change of the title from 'Seikatsu-no-Kagaku' to 'Seikatsu-Kagaku', the topics of books were changed from science and technology in daily life to several parts of daily life. And the aim of publication was changed. At first, it was emphasized that the people themselves improve their daily life connected with science. Later, improvement of daily life for a national goal was emphasized.

1. はじめに

小論では、1941年8月から1947年12月にかけて羽田書店から刊行された「生活科学新書」（初期には「生活の科学新書」）全49冊

について、その刊行の趣旨と全体構成の変化を確認し、戦時下の「生活科学」の特徴を検討する。従来の理科教育史研究、科学思想史研究は、この「生活科学新書」の検討を欠いてきた¹。

戦後すぐ、GHQの強い指導のもとに作成されたといわれる文部省の「新教育指針」では、「新日本教育の重点」のひとつとして「科学的教育の普及」が位置づけられ、「日本国民の科学的水準が低いのは何ゆえであるか」という問いに対して、「生活の科学化が不十分であった」ことも、指摘されていた。板倉聖宣²は、当時の日本の社会にはアメリカからの生活単元・問題解決学習を、たいして異質のものとして積極的に取り入れていこうとする基盤が存在していたととらえる。しかし、その「基盤」として板倉が目指すものの中に「生活科学新書」は含まれていない。文部省科学教育局が1947年度にすぐれた科学教育を実施していた小学校にその実践報告を求めた際、その報告書には「生活科学」をテーマにしたものが少なくなかった点に板倉は注目し、金沢市の瓢箪町小学校から提出された報告書「生活科学への道」の冒頭の文章を紹介している。ところが、小論で示すように同じ「生活科学への道」というタイトルの本が、「生活科学新書」の第10冊目として1942年3月にすでに発行されていたのである。

そもそも「生活の科学化」は、戦後になってからGHQの指導のもとに重要な課題として意識されるようになったのではなく、1930年代に日本で展開された「科学的精神」をめぐる議論の延長上に、重要課題として焦点化され位置づけられていたものである³。1941年5月27日に閣議決定された「科学技術新体制確立要綱」においても、「科学精神の涵養方策」のひとつとして「国民生活の科学化」が重視されていた。そして複数の団体が設立され、この「生活の科学化」運動は「大政翼賛会を中心とした一大官製国民運動として全国的に展開されていた」⁴。

たとえば、戦前の教育科学研究会のリー

ダー的存在であった城戸幡太郎を代表者として「生活科学研究会」が結成され、『婦人公論』1941年4月号には同会主催の「生活科学ゼミナール」会員の募集広告が掲載され、このようなゼミナールによる国民生活指導者教育をふまえて、1941年7月31日に「国民生活協会」が結成され、1942年4月には同協会によって「国民生活学院」「国民生活学院附属生活科学研究所」が設立された⁵。

また、大政翼賛会から助成金を受けて「国民生活科学化協会」が、名誉会長として当時の厚生大臣小泉親彦、会長に大河内正敏、顧問に文部大臣橋田邦彦らをすえて1941年9月に設立された。さらに、小泉親彦の「人文科学、自然科学の両分野にわたり有能な専門家を集めて権威ある厚生省の外郭機関をつくり、生活科学の基礎の確立をはかる」という意図を受けて1941年12月には「日本生活科学会」が設立された⁶。

河原宏は「戦時下の生活科学構想にも、むしろ戦後において開花すべき種子は予め含まれていたといえるかもしれない」という評価を与えている。河原がここで「生活科学構想」と表わしているのは、それは構想に終わって具体化されるまでにいたらず、特に1944年以降になると「もはや生活そのものになりたちえなかった」のであり、「そこでは生活の科学化も生活科学も当然ありえない」状況にあったと、とらえているためである。したがって、いったん断絶したためにそれは「戦後において開花すべき種子」だったのである⁷。しかし「生活科学新書」は、部分的であったにせよ構想を実際に具体化したものであり、しかも1944年に入ってから刊行され続けたのであり、戦時下、すでにそれは「開花」していたといえる。

その「生活科学新書」も、最初は「生活の

第2次大戦下日本の「生活科学新書」について

科学新書」としてスタートした。それが途中で「生活科学新書」に変わり、刊行の趣旨にも変化が見られた。また、「続刊」として予告されていたものにも変化が見られ、初期の段階から挙げられていたにもかかわらず、結局刊行されずに終わったものもある。なかには、戦後すぐに他のものと差し替えられて、目録から消えたものもある。

以下では、そのようは変化も確認したうえで、また同じく戦時下に刊行されていた「国民科学新書」と比較することによって、戦時下の「生活科学」の特徴を検討する。

2. 「生活科学新書」の全体構成

以下は、実際に刊行された「生活科学新書」（7冊目までは「生活の科学新書」）の、目録上の番号、書名、初版の発行年月、著者名である。

- 1 病気をめぐって、1941年8月、緒方富雄
- 2 米と食糧、1941年10月、永井威三郎
- 3 わが家の電気、1941年9月、関 重廣
- 4 音の四季、1941年11月、栗原嘉名芽
- 5 人口問題、1941年12月、美濃口時次郎
- 6 綴方と自然科学、1941年12月、林 巖
- 7 生活の物理、1942年1月、三石 巖
- 8 人と細菌、1942年2月、押鐘 篤
- 9 生物の進化、1942年2月、石田周三
- 10 生活科学への道、1942年3月、菅井準一
- 11 被服の知識、1942年4月、小川安朗
- 12 化学と生活、1942年5月、白井俊明
- 13 父親と育児、1942年6月、齋藤文夫
- 14 建築と生活、1942年8月、木村幸一郎
- 15 わが家の生物学、1942年8月、佐藤隼夫
- 16 天文と人生、1942年9月、村上忠敬
- 17 洗濯の科学、1942年9月、菱山衡平
- 18 生命とは何か、1942年10月、藤田 康
- 19 学び方の科学、1942年10月、相良守次
- 20 時と暦、1942年10月、荒木俊馬
- 21 家具の科学、1942年11月、木檜怨一
- 22 光の四季、1942年11月、福本喜繁
- 23 結核の科学、1942年12月、正木不如丘
- 24 牛乳と乳製品、1943年2月、里 正義
- 25 音楽と生活、1943年2月、下總皖一
- 26 道路と生活、1943年4月、山本 亨
- 27 煙草と健康、1943年4月、宇賀田為吉
- 28 自動車と汽車、1943年7月、隈部一雄
- 29 眼と生活、1943年6月、近藤忠雄
- 30 緑地生活、1943年8月、井下 清
- 31 人造繊維、1943年8月、隅田武彦
- 32 生活の美、1943年8月、金原省吾
- 33 熟練者になるまで、1943年9月、中島義行
- 34 気象と国民生活、1943年10月、大谷東平
- 35 子供と生活環境、1943年11月、橘 覚勝
- 36 地下鉄道、1943年12月、須之内文雄
- 37 魚の知識、1944年5月、檜山義夫
- 38 水の衛生、1944年5月、廣瀬孝六郎
- 39 飛行機の話、1944年8月、岡本哲史
- 40 薬の知識、1944年11月、原 三郎
- 41 性格の話、発行年月日不詳、正木 正
- 42 精神病の話、1946年8月、丸井清泰
- 43 酒の科学、1947年4月、田中終太郎
- 44 からだを護るもの、1946年1月、緒方富雄
- 45 歯と健康、1946年10月、渡邊 巖
- 46 母体の科学、1946年8月、赤須文男
- 47 石炭、1947年3月、佐藤興助
- 39 神経衰弱の正体、1947年8月、中村古峡
- 10 農作物と気象、1947年12月、大後美保

ここで、最後の二冊は戦後になって差し替えられたもので、「10 生活科学への道」と「39 飛行機の話」は、戦後になって目録からも姿を消した。特に「10 生活科学への

道」については、1947年7月に発行された「40 葉の知識」の第3刷に掲載された目録では、「10 石炭」「47 石炭」となっていて、あわてて差し替えられたことがうかがわれる。これらが差し替えられた理由は不明であるが、戦時下と戦後の不連続が現れている部分といえる。

戦後、新版として発行されたもので確認できているのは1946年8月の「42 精神病の話」と「46 母体の科学」が最初のもので、終戦から一年経っているが、戦後すぐの1945年10月には「1 病気をめぐって」の第5冊が発行されている。このように増刷も含めてとらえるなら、「生活科学新書」は戦中から戦後へと継続的に発行されていたといえる⁸。

なお、1950年3月に発行された「19 学び方の科学」の第4刷には、「生活科学新書総目録」として「48 衣食住の歴史、板澤武雄」「49 麻酔剤の発見者たち、宇津木保」「50 応用化学の世界、石井義郎（近刊）」が掲載されていた。しかしこれら三冊が「生活科学新書」として実際に発行されたかどうかは不明である。確かに羽田書店から1948年8月に板澤武雄『衣食住の歴史』が出版されているが、そこには「生活科学新書」の一冊であることは明示されていない。

3. 刊行の趣旨と編集顧問

これら「生活科学新書」の刊行の趣旨は以下のとおりであった。いまのところ「1 病気をめぐって」の初版が未確認であるため、「2 米と食糧」掲載の「刊行のことば」を示す。

現在わが国の欠陥の一つは私達国民が余りにも科学的な教養に乏しい点である

と思ひます。それにこれまでの科学書はともすると専門的な記述に走つて、私たちが科学といふものに大変近づきにくい感じを受けてゐるばかりでなく、いかにも日常生活とは縁遠く、普通の人の手のとどかないほど高遠なものやうに考へられてきました。しかしこのことは科学自身にとつても、また私たち国民にとつても、決して幸福なことではありませんでした。国民一般の科学的知識の水準が低いのでは、その国の科学の正しい成長がとても望みえられないといふことは、歴史がはつきりと物語つてをります。

もう科学は「科学者の科学」ではなく、「国民大衆の科学」でなければなりません。私達が毎日々の生活で、いつも生活と科学との結びつきを反省してゆくことは、それだけでもすでに高い意味をもつだけでなく、また科学的な精神錬成への力強い第一歩にもなるのです。

この度企てました「生活の科学」新書は、国民生活の科学化に充分の任務と責任を果たさうとする微意のあらはれに外なりません。「生活の科学」新書は単なる科学知識の書ではなくして、生きた科学書として、天文、物理、化学、生物等の自然現象のみならず、私達の生活を取りまくすべての事柄について、国民生活に重点をおき乍らわかり易い記述によつて、科学的な説明を試み、その原理、沿革、社会的、経済的背景、それに挿話などとり交ぜた記述によつて、興味の中に国民生活の科学化を実現し、また科学的な精神の開発に力を致したいと願つてゐるものです。

かくて私達がこの科学的な教養を豊かにすることによつて、輝かしいわが国科

第2次大戦下日本の「生活科学新書」について

学の将来が約束され、しかも刻下の要請たる高度国防国家の建設に微力ながらも貢献できるものと確信いたします。

幸に本書が広く各界各層の熱意ある御支持によりまして、所期の目的が達成できますならば、これにまさる喜びはありません。理解ある御援助をいただけますれば幸であります。

昭和十六年八月

あとで確認するように刊行の趣旨の内容はその後、二回ほど顕著な変更が加えられる。しかしそのなかでも一貫していたのは、生きた科学書として国民生活に重点を置きながら、わかりやすく科学的な説明を試みる、という点であった。そして、実際にどのような役割を果たしたかは不明であるが、編集顧問が置かれていた。「2 米と食糧」掲載の「編輯顧問」は以下のとおりであった。

井上兼雄：理化学研究所嘱託
大谷東平：中央气象台技師
古屋芳雄：厚生省勅任技師、医学博士
齋藤 齊：保険院総務局数理課長
篠原 登：逓信省工務局調査課長・工博
菅井準一：企画院技師、藤原工大講師
柘植秀臣：東亜研究所、理学博士
辻 二郎：理研研究員、工学博士
富塚 清：東京帝大教授、工学博士
林 麟：慶大助教授、医学博士
平山 嵩：東京帝大教授、工学博士
本多静雄：興亜院技術部長
交川 有：特許局電気部強電課長
松前重義：工学博士
宮本武之輔：企画院次長、工学博士
毛里英於菟：企画院総務室第一課長

この編集顧問の名簿は1942年12月発行の「23 結核の科学」まで掲載され、それ以降は掲載されていない。また、宮本武之輔は1942年2月発行の「9 生物の進化」以降、編集顧問から抜けている。

上記のとおり、編集顧問は自然科学者、医学者、工学者によって占められていた。それを反映してか、「生活科学新書」の全体構成は、一部に「32 生活の美」のような異質なものが含まれているが、自然や技術、病気や健康に関わるものが大半を占めている。しかしそれらのとり上げ方は、刊行の趣旨にもあるとおり、国民生活に重点を置き、それと関連づけるという点で特徴的であったといえる。そのことは、ほぼ同じ時期に刊行されていた他の科学書シリーズと比較すると、より明瞭に確認できる。

4. 「国民科学新書」との比較

戦時下に刊行された科学書シリーズには「生活科学新書」の他に、「国民科学新書」や「科学文化叢書」もあった。

山海堂出版部より1942年12月から1944年7月にかけて刊行された「国民科学新書」全10冊の刊行の趣旨は、以下のように「国防」との関連を強調しながら「日本的科学の確立」を謳っていた。

山海堂「国民科学新書」の発刊に際して

日本が科学を欧米から輸入した時代は終った。今や日本は、日本的科学の確立に自ら努力しなければならない。そしてその日本的科学は、全国民頭脳の総力によつて躍進を計らねばならない。日本はその日本的科学によつて自らを高度国防国家とし、同時に大東亜を建設しなければ

ばならないのである。

山海堂「国民科学新書」はその必要に鑑みそれに役立つべく生れた。そして先づこの新書に於ては、科学の全部門に亘りその基礎から興味深く平易に説くため、材を国防と絶対不可分にある国民の日常生活に採り、その科学的知識と国防力を啓培せんことに努めた。故にそれは科学性に於て十分でなかった国民一般、特に次代を背負ふ青少年の身辺に至り、科学の何たるかを具体的に知らしめるであらう。

近年青少年層を対象とし、科学の普及を目的とした出版物は決して少くない。しかしそのすべてが完全な責任と万全の準備を以てなされてゐると思へない。この秋に当つて多年科学雑誌書籍の出版を以て報国してきた山海堂は、その責務の愈々重大なるを感じ、衆知の大方針を益々徹底するため、多年十分に準備したこの新書の連刊を茲に実現したのである。そしてこの新書は、読者がその興味と必要とに於て自由に選択し得るやうにし、印刷は単式最新の技術により、親しみ易いやう美しい装丁にした。

われわれはあらゆる犠牲を払つてこの企画を完遂し、日本科学の普及と興隆に寄与するであらう。その微衷を察し、現時国民科学振興の重要性を認めその知識を求める人々が、希望と忠言を以てこの業の完成に協力されんことを熱望する次第である。

皇紀二千六百二年十二月八日 来島捨六

このような刊行の趣旨を受けて、書名にも「国防」色の強いものが並んでいる。「国民科学新書」の書名、発行年月、著者名は下記

のとおりである。

温度の科学、1942年12月、福本喜繁
国防と電気通信、1943年3月、熊谷三郎
軍需資源読本、1943年5月、秋月俊一郎
航空の科学、1943年7月、金藤正治
ゴムの科学、1943年9月、田崎友吉
生存競争の科学、1943年9月、阿部余四男
放電の科学、1943年9月、浅見義弘
戦闘の物理、1943年11月、竹内時男
テレビジョン、1944年6月？、高橋重雄
国防と都市計画、1944年7月、石川栄耀

このうち「温度の科学」や「放電の科学」のように書名も内容も「国防」と関連づけられていないものもあるが、それらは生活との関連づけもほとんど意図されず、一般向けの解説書的な内容になっている。

また、誠文堂新光社からは「科学文化叢書」が刊行されていた。筆者が現在までにその内容を確認できているのは、以下の7冊である。それぞれ、目録上の番号、書名、発行年月、著者名を示しておく。

- 3 新数学対話、1941年10月、黒田孝郎
- 4 建築と文化、1941年10月、藤島亥治郎
- 7 電気、1941年12月、宇田弘道
- 8 未開人の数学、1942年3月、矢野健太郎
- 9 地殻の変動、1942年3月、宮部直巳
- 10 研究所風景、1942年7月、東 恒人
- 12 理の探求、1942年9月、山根 薫

この「科学文化叢書」の刊行の趣旨は確認できていない。上記の冊子にはどこにも掲載されていなかった。しかし基本的には、自然科学や工学の成果を体系的ではあるが入門的に展開した内容となっている。意図的に生活

第2次大戦下日本の「生活科学新書」について

と関連づけようという姿勢は見られない。

このように、一方で「国防」と関連づけようと意図された「国民科学新書」があり、他方で自然科学や工学の入門書としての「科学文化叢書」があったわけだが、それらに対して「生活科学新書」は、単なる入門書ではないという点、せまく「国防」ではなくより広く国民生活との関連づけを意図していたという点に、特徴があった。その「生活科学新書」も、刊行が進むにつれて当初の構想や趣旨からのズレが生じていった。そのような変化のなかに、戦時下「生活科学」の実態の一端をとらえることができる。次に、その変化を確認する。

5. 「生活科学新書」の変化

(1) 未発行のものと予定になかったもの

当初、刊行が予定されていた「新書」は以下のとおりだった。「2 米と食糧」に掲載されていた「続刊予告」の書名と著者名である。

- 地震の話、坪井忠二
気象の話、大谷東平
- 遺伝物語、古屋芳雄
水の衛生、廣瀬孝六郎
- 石油の話、大村一蔵
火と熱、白井俊明
- 栄養の話、神立 誠
- ラジオの世界、溝上 銈
飛行機の話、木村秀政
牛乳の話、里 正義
- トーキーの出来るまで、渡邊俊平
- 生活の数字、齋藤 齊
音の四季、栗原嘉名芽
- 皮革の話、犬飼哲夫

- 台所の科学、沼畑金四郎
生活と科学技術、菅井準一
被服の話、小川安朗
- 防空に就て、富岡東四郎
育児の知識、齋藤文夫
人造繊維、隅田武彦
天文の話、村上忠敬
- 住宅の知識、大村巳代治
薬の知識、井川俊一
生物の進化、石田周三
建築と科学的家相、木村幸一郎
細菌物語、細谷省吾
- 害虫と植物、古川晴男
- 海草の話、岡田喜一
- 家畜の話、伊藤祐之
自動車の話、隈部一雄
洗濯の科学、菱山衡平
- 野草の食糧化、宮本三七郎
- レンズの話、会田軍太夫
- ガラスの話、会田軍太夫
- 住宅の科学、平山 嵩
人口問題、美濃口時次郎

これらは、そのままの書名と著者によって発行されたものもあるが、書名が関連したものに変更されたもの、著者が他に代わって発行されたものもかなりある。しかし、結局発行されずに終わったものも半数近くある。それは上で●を付したものである。

それとは逆に、当初の予定にはなかったけれど発行されたものもある。戦中に発行されたものを以下に示す。

- 15 わが家の生物学
- 18 生命とは何か
- 19 学び方の科学
- 20 時と暦

- 21 家具の科学
- 22 光の四季
- 23 結核の科学
- 25 音楽と生活
- 26 道路と生活
- 27 煙草と健康
- 29 眼と生活
- 30 緑地生活
- 32 生活の美
- 33 熟練者になるまで
- 35 子供と生活環境
- 36 地下鉄道
- 37 魚の知識

以上のように、当初予定されていたのに発行されなかったのは、「地震の話」「石油の話」「台所の科学」「ガラスの話」「ラジオの世界」など、生活に関わりのある自然や技術に関して科学的に説明しようとするものが多かった。それに対して、当初の予定にはなかったけれども発行されたものには、「音楽と生活」「煙草と健康」「眼と生活」「生活の美」「熟練者になるまで」などのように、生活のある側面そのものを対象としたものが多かった。生活に関連する科学から生活そのものへ、「生活科学新書」の変化（展開）には、そのような傾向が見られる。

このような変化は、当初の「生活の科学新書」がやがて「生活科学新書」に変わったことと無関係ではなかった。

(2) 「生活の科学」から「生活科学」へ

当初「生活の科学新書」として刊行されていたのが「生活科学新書」に変わるのは、1942年2月発行の「8 人と細菌」からだった。しかし刊行の趣旨については相変わらず「『生活の科学新書』刊行に際して」のまま

だった。その部分が「『生活科学新書』刊行に際して」と変わるのは、次の「9 生物の進化」（1942年2月）からだった。

そしてこの「9 生物の進化」以降、編集顧問から宮本武之輔の名が消えた。さらに「9 生物の進化」から「10 生活科学への道」（1942年3月）にかけて、複数の編集顧問の肩書きの変更があった。交川有は「特許局電気部強電課長」から「藤倉電線技師」へ、松前重義は「工学博士」から「逓信省工務局長、工学博士」へ、菅井準一は「企画院技師、藤原工大講師」から「技術院参技官」へと変わった。

菅井準一が著者である「10 生活科学への道」は、すでに示しておいたようにもともとは「生活と科学技術」のタイトルで予告されていたものだった。それが「生活科学への道」として予告されるようになったのは「5 人口問題」（1941年12月）からだった。その「10 生活科学への道」に掲載された「続刊」の予告には、新たに加わったものも多く示されていた。新たに加わったものの書名と著者名は以下のとおりである。

- わが家の生物学、佐藤隼夫
- 暦と時、荒木俊馬
- 蚕と絹、川口栄作
- 花と庭、原 秀雄
- 遺伝の話、篠遠喜人
- 栄養の話、佐々木林治郎
- 色彩と生活、星野昌一
- 汽車と電車、徳永晋作
- 園芸と生活、島 善鄰
- 誤謬の科学、前田嘉明
- 優生と結婚、青木延春
- 音楽と生活、下總皖一
- 品種の改良、野口彌吉

第2次大戦下日本の「生活科学新書」について

計量の話、米田麟吉

このうち○を付したのはその後実際に発行されたものである。

このように「生活の科学」から「生活科学」への変更は、単なる表現の変更ではなく、この「新書」の構想の再検討・変更を伴うもので、1941年末から1942年3月頃にかけて進化した。そしてそれは、少なからぬ編集顧問の社会的立場の変化も伴うものであった。そこには「生活の科学化」をめぐる社会状況の変化が反映されていると思われるが、それがどのようなものであったかはまだ明らかにできていない。したがって「生活科学」への変更が意味することも、不明な点が多く残されている。ただ、この変更は当然ではあるが刊行の趣旨にも反映した。やや遅れてではあるが、刊行の趣旨にも変更が加えられたのである。

(3) 刊行の趣旨の変化

刊行の趣旨の内容に大きな変更があったのは、1942年8月25日発行の「14 建築と生活」においてであった。その直前、8月1日発行の「15 わが家の生物学」までは変更がなかった。

ただし、小さな変更はそれまでもいくつかあった。たとえば最初、刊行の趣旨の日付は「昭和十六年八月」であったのに、1941年11月発行の「4 音の四季」からは何故か「昭和十六年七月」に変わっていた。

刊行の趣旨に新たな文言が加わり、一部が削除されて「14 建築と生活」では以下のようにになっていた（下線を付した部分が変更箇所）。

生活科学新書刊行の趣旨

現在わが国の欠陥の一つは私達国民が余りにも科学的な教養に乏しい点であると思ひます。それにこれまでの科学書はともすると専門的な記述に走つて、私たちが科学といふものに大変近づきにくい感じを受けてみたばかりでなく、いかにも日常生活とは縁遠く、普通の人の手のとどかないほど高遠なもののやうに考へられてきました。しかしこのことは科学自身にとつても、また私たち国民にとつても、決して幸福なことではありませんでした。国民一般の科学的知識の水準が低いのでは、その国の科学の正しい成長がとても望みえられないといふことは、歴史がはつきりと物語つてをる所であります。

今や未曾有の歴史的転換期に直面して、高度国防国家建設の為に、輝かしき聖戦遂行の為に、科学技術の振興が絶対的な要請とされるやうになり、従つて所謂「生活科学化運動」の全面的な展開が企てられるに至つた次第であります。

もう科学は「科学者の科学」ではなく、「国民大衆の科学」でなければならぬことはいふまでもないところです。

この度企てました生活科学新書は、国民生活の科学化に充分の任務と責任を果たさうとする微意のあらはれに外なりません。生活科学化を単に生活の合理化に止まらしめない趣旨より、生活科学新書は単なる科学知識の書ではなくして、生きた科学書として、天文、物理、化学、生物等の自然現象のみならず、私達の生活を取りまくすべての事柄について、国民生活に重点をおき乍らわかり易い記述によつて、科学的な説明を試み、その原

理、沿革、社会的、経済的背景、それに挿話などとり交ぜた記述によつて、興味の中に国民生活の科学化をはかり、また科学的精神の陶冶に力を致したいと願つてゐるものです。

かくて国民がこの科学的な教養を豊かにすることによつて、刻下の要請たる高度国防国家の建設に微力ながらも貢献できると共に、輝かしいわが国科学の将来が約束されるものと確信いたします。

幸に本書が広く各界各層の熱意ある御支持によりまして、所期の目的が達成できますならば、これにまさる喜びはありません。理解ある御援助をいただけますれば幸であります。

昭和十六年七月

羽田書店

この中で、新たに加わった文言は「今や未曾有の歴史的転換期に直面して、高度国防国家建設の為に、輝かしき聖戦遂行の為に、科学技術の振興が絶対的な要請とされるやうになり、従つて所謂『生活科学化運動』の全面的な展開が企てられるに至つた次第であります」と、「生活科学化を単に生活の合理化に止まらしめない趣旨より」の、二ヶ所である。

また、従来のもので削除されたのは以下の文言だった。

私達が毎日々々の生活で、いつも生活と科学との結びつきを反省してゆくことは、それだけでもすでに高い意味をもつだけでなく、また科学的精神錬成への力強い第一歩にもなるのです。

以上の変更は要するに、日々の生活の中で生活と科学との結びつきを反省していくというような、国民が下から積み上げていく生活

の合理化から、高度国防国家建設という国家の大きな目標に向けて「生活科学化運動」の全面的な展開を強く促すことへの、転換であった。いわば、下からの生活の科学化が放棄され、上からのそれが前面に出てくるようになったのである。

これ以後、刊行の趣旨に変更はない。しかし、やがてそれは掲載されなくなっていく。すなわち「32 生活の美」（1943年8月）と「35 子供と生活環境」（1943年11月）には掲載されておらず、さらに「37 魚の知識」（1944年5月）以降、戦後の「10 農作物と気象」（第2刷1950年4月）までずっと、刊行の趣旨は掲載されなかった。

ただし、戦後の「40 葉の知識」（第3刷1947年7月）には、以下のように短縮された刊行の趣旨が掲載されていた。

生活科学新書刊行の趣旨

生活科学新書は単なる科学知識の書ではなくして、生きた科学書として、天文、物理、化学、生物等の自然現象のみならず、私達の生活を取りまくすべての事柄について、国民生活に重点をおきながら、分り易い記述によつて、科学的な説明を試み、その原理、沿革経済的背景、それに挿話などとり交ぜた記述によつて、興味の中に生活の科学化を実現し、また科学的精神の開発に力を致したいと願つてゐるものであります。

幸い本書が広く各界各層の熱意ある御支持と、理解ある御声援をいただけますれば、これにまさる喜びはありません。

ここからもわかるように、戦中と戦後を連続するものとして、国民生活に重点をおきながら科学的説明を試みる、ということがあつ

たのである。

6. まとめ

戦中・戦後と継続的に刊行され続けた「生活科学新書」は、国民生活に重点を置きながら、わかりやすく科学的な説明を試みるものだったという点で、戦中の他の科学書シリーズと比較しても、特徴的であった。

しかし、1942年に入るあたりから、「生活の科学新書」から「生活科学新書」へと名称が変更される中で、とりあげられるテーマは、生活に関わりのある自然や技術に関して科学的に説明しようとするものから、生活のある側面そのものを対象としたものへと、その中心が変わっていった。それに伴って「刊行の趣旨」も変更された。すなわち、国民が下から積み上げていくような生活の合理化をすすめることから、高度国防国家建設という国家の大きな目標に向けて「生活科学化運動」の全面的な展開を強く促すことへと、転換したのである。

【付記】本稿は、平成17～19年度科学研究費補助金 基盤研究(C) 「戦時下日本の科学論・技術論の展開に関する実証的研究」による研究成果の一部である。

注

- 1 『日本科学技術史大系』（第一法規、1966年）、『理科教育史資料』（東京法令出版、1986年）どちらにおいても、「生活科学新書」にはふれられていない。
- 2 板倉聖宣『日本理科教育史』第一法規、1968年。
- 3 詳しくは、北林雅洋「『科学的精神』論から『生活の科学化』へ—科学観の社会的定着に着目して—」木村元編『人口と教育の動態史—1930年代の教育と社会—』多賀出版、2005年、503頁～538頁、を参照。
- 4 金子淳『博物館の政治学』青弓社、2001年。
- 5 橋本紀子「母性の社会化と国民生活学院」中内敏夫ほか編『教育科学の誕生』大月書店、1997年。
- 6 河原宏「戦時下民衆の『生活』と生活科学」『昭和政治思想研究』早稲田大学出版部、1979年。
- 7 同上。
- 8 同様に戦中から戦後へと継続しているものに「国民生活科学化協会」が1942年1月から発行していた月刊誌『生活科学』がある。同誌については、戦時下で1945年4月に休刊となり、戦後1946年7月に復刊されたことは確認できているが、現在所在が確認できているのは部分的であり、その全体像は不明である。